様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：４４５２３
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2016～2017
課題番号：１６Ｈ０７３９６

研究課題名（和文）旧植民地下の日本語文学と戦後文学における植民地表象の通史的研究

研究課題名（英文）A Study on the Complete History of Literary Works in Japanese in Former Japanese Colonies and Colonial Representation in Postwar Japanese Literature

研究代表者
小泉　京美（KOIZUMI, Kyomi）

武庫川女子大学短期大学部・日本語文化学科・講師

研究者番号：７０７７９２０６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：戦前期における日本人文学者の植民地体験や海外渡航とそれに基づく文学的営為について調査を行うとともに、国内外で発行されていた日本語雑誌の調査と分析を進め、両者がどのように関連づけられるか考察を進めた。とくに、人脈や現地での文学運動との関わりから重要な展開を見せた短詩型文学の動向に着目し、詩・短歌・俳句・川柳を中心に、資料の調査と分析を行った。また、戦前・戦中の文学運動や表現実践が日本の戦後文学にどのような展開をもたらしたか考察した。これらの成果によって、日本の旧植民地をはじめとする海外の日本語文学の状況と日本近代文学の展開の結びつきについて歴史的に捉え直すことができた。

研究成果の概要（英文）：This article researches overseas travel by Japanese literary figures during the prewar period and their literary activities based on their experiences, while also examining and analyzing magazines in Japanese that were published inside and outside Japan during the same period to examine the relevance between the two groups. In particular, the study focuses on the movements of short-form poetry, which showed significant development based on human networks and local literary movements, in examining and analyzing relevant situations especially in such fields as poetry, tanka, haiku, and senryu. This study also discusses how the literary movements and practices of representation in the prewar and wartime period affected the development of postwar literature in Japan, successfully redefining the literary situations both in Japan and in former colonies, as well as the development of literary works in Japanese, from a historical viewpoint.

研究分野：日本文学

キーワード：日本語文学　戦後文学　短詩型文学　植民地表象　異文化体験　文学史

１．研究開始当初の背景

（1）本研究課題は、研究代表者がこれまでに行ってきた日本・中国・台湾の各機関に収蔵されている日本語文学関連資料の調査の延長線上に着想されたものである。研究代表者は、これまで、科研費研究課題「アジアにおける日本語文学の歴史的展開と植民地」（2011-13 年度、研究課題番号 11J00724）に取り組み、その成果をコレクション・モダン都市文化第 5 期第 85 巻『満洲のモダニズム』（ゆまに書房、2013 年）にまとめた。また、翌年から東洋大学井上円了記念研究助成を受け、「東アジアの地政学的条件と日本近代文学史に関する総合的研究」(2014 年度)、「満洲における日本近代文学の流通と日本人文学者の植民地体験の相関性についての研究」（2015 年度）に取り組み、日本の旧植民地における日本語文学の展開を文学史に位置付ける研究を進めてきた。

（2）海外における日本人の文学活動についての研究は、まず研究の基層となる資料の書誌的な調査が重視され、国内外の各機関に収蔵されている関連資料の発掘調査が進められてきた。本研究課題の中心となる旧満洲における日本語文学の研究に関しては、中国各地に分散収蔵されている資料の書誌情報を統合する総合目録の整備が進み、これらを活用した復刻版の刊行やデジタルアーカイブ化が進展してきた。

これら資料面の基盤整備の進捗に後押しされ、近年、ようやく満洲における日本語文学の研究は公開された資料の分析や評価に重点が移行しつつある。また、日本人文学者の満洲体験については、日本文学研究の周辺的な領域としての位置付けが見直され、植民地の日本語文学が置かれた状況の多様性や異言語・異文化との関わりを視野にいれた横断的な研究が進展している。

一方、植民地文化研究やポストコロニアル批評の隆盛は、すでに一定の蓄積をなしつつあった出版文化・メディア研究の領域に、日本語メディアの流通が必ずしも今日の経路とは重ならないことに注意を促し、版元・取次・書店・販路等、植民地における日本語文献の出版や流通に関する研究が進められてきた。さらに、検閲研究の領域でも、帝国本国と植民地との地政学的関係を視野に入れた日本文学・日本語文学の出版・流通の実態が少しずつ解明されている。

（3）研究代表者はこれまでの研究経過から、日本と満洲の文学的な結び付きを検証し、満洲でなされた日本人の文学活動の全容を明らかにするために、満洲における日本文学の流通と日本人文学者の植民地体験との相関性を検証する必要があると感じていた。

また、先行する植民地文化研究、出版文化研究を継続発展させることに加え、旧植民地を含む海外の国や地域での人の移動や書物の流通を視野に入れ、現地でなされた文学運動と結びつけて把握する必要があった。それらの作業を通じて、日本の近代文学史を捉え直し、戦前・戦中から戦後にかけての日本文学の場の成立や問題意識の系譜を検証することができると思われたからである。

２．研究の目的

本研究課題は戦前期における日本人文学者の植民地体験と海外渡航、それに基づく文学的営為について調査を行うとともに、国内外で発行されていた日本語文献の調査と分析を進め、両者がどのように関連づけられるかについて考察することを目的とする。とくに、以下の二点に重点を置き、研究目標とした。

（1）満洲を描いた日本の文学作品の系譜や、満洲体験を有する日本人文学者を一覧化するといった、旧満洲で文学史的な関心に基づいてなされた言説の分析を行う。また、これらの関心が、現地での書物の流通や読書環境に反映されたことに着目し、満洲における日本文学の流通と日本人文学者の植民地体験の相関性を明らかにする。

（2）旧植民地における日本文学の流通と受容の状況を解明することで、アジア太平洋戦争終結後の日本で展開される多様な植民地表象や、引き揚げ体験を有する作家の文学表現の特質を明らかにする。また、これらの成果と関連づけながら、日本の戦後文学における場の成立や問題系の継承について、歴史的な視点から考察する。

３．研究の方法

本研究の目的を達成するために、満洲各地の図書館に収蔵されていた日本近代文学に関する蔵書と関連資料の調査を行う。調査収集した資料の書誌を整理し、種類・収蔵期間・地域(所蔵館)ごとに分類し、当該地域における日本近代文学関連文献の流通について考察する。

次に、日本人文学者の植民地体験について文学者別に整理し、目的・時期・地域・旅程・仲介者、および現地で接触した文学者や文化人等の詳細を一覧化する。その上で、日本人文学者の旅行や視察が、現地の文学者や文化人に与えた影響と、現地の文学運動や関連文献の流通との間に、どのような相関性があるかを検証する。

上記の作業をふまえて、戦前・戦中から戦後にかけての文学状況について分析を行い、旧植民地をはじめ、海外で展開された日本語文学や、それに関わった日本人文学者の体験が、日本の戦後文学にどのような場を用意し、問題系を浮上させたのかを考察する。

４．研究成果

本研究の主な成果として、以下の（1）～

（4）が挙げられる。なお、ここで得られた成果と知見は、今後、引き続き深化させていく予定である。

（1）研究全体の総説として、日本近代文学と「外地」について、夏目漱石・正岡子規・高村光太郎・横光利一ら日本人文学者の渡航体験との関わりから整理し、その概要をまとめた。近年定着した「日本語文学」や「世界文学」といった呼称の流通の背景に、ポスト・コロニアル・スタディーズやカルチュラル・スタディーズの潮流による「日本近代文学」概念の問い直しがあったこと、日本文学をとりまく多文化・多言語的な状況をふまえて作品の読み直しが進んだことを確認した。

そもそも、森鷗外や夏目漱石に始り、近代作家の多くは海外渡航（留学・観光・従軍・移民）による異文化体験に基づいてその文学的営為の輪郭を形作ってきた。その渡航体験を支えた地政学的な勢力図の書換えは、文学的な想像力に「外地」という空間を新たにもたらしたと言える。

このことについて、とくに、帝政ロシアが清から租借し、日露戦争後に日本に租借権が移譲された中国の都市、大連を例に概説した。大連は中国・ロシア・日本の文化が混ざり合いながら、多文化的な植民都市として近代化が進んだ。その混淆的な文化状況を反映して、「内地」の前衛詩運動が最盛期を迎える 1924 年に発行された日本語の詩誌『亞』は、日本文学の伝統と距離を保ちながら前衛的な詩的言語の実験を行っている。これらの文化事象を取り上げながら、文化の越境がもたらす日本語表現の変容をふまえて、「日本近代文学」が成立する条件について考察した。

また、その研究成果を「越境する想像力――「外地」から見る日本近代文学――」と題して、2016 年 12 月 10 日に、武庫川女子大学で開催された第 52 回阪神近代文学会 2016 年度冬季大会にて行った。

（2）神戸市兵庫区に生まれた詩人・竹中郁について、その渡欧体験を前衛写真家のマン・レイらとの接触から考察し、写真や映画といった新興メディアとの結びつきをふまえて、文学表現の変遷をたどった。

竹中郁は 20 世紀初頭、日本を代表する海港都市であった神戸の自由な芸術的風土の中で、モダニティ溢れる詩精神を洗練させた詩人である。自宅を海港詩人倶楽部と称し、詩誌『羅針』を発行するなど、詩人としての活動は関西学院大学在学中に本格化し、洋画家の小磯良平とともに渡欧して前衛映画やシュルレアリスムなど新興芸術の手法を持ち帰った。戦後は一転して児童詩の普及に努めたが、戦前期に確立したモダニズム詩の手法は、竹中郁の全詩業に通底するものである。

竹中郁は渡仏中に、ロベール・デスノスの詩をシュルレアリスムの手法を用いてマン・レイが映像化した《ひとで》（1928 年）に出会い、その感激からマン・レイのアトリエを訪れている。帰国後、竹中は、後に代表作と目されることになるシネ・ポエムを発表し、一躍モダニズム詩の旗手として注目を集めた。

一方、1934 年には堀辰雄らの『四季』に参加し、日本がファシズムへの道を大きく開く二・二六事件が勃発した直後には、詩誌『羅針』を終刊、その詩作を大きく変化させることになる。アジア太平洋戦争が勃発する前年の 1940 年に小磯良平とともに沖縄を訪れ、その体験をもとに「首里逍遙」9 篇を含む詩集『龍骨』（湯川弘文社、1944 年）を上梓する。さらに、榊原美文『国民詩朗読のために』（日本出版社、1942 年）、与田準一編『少国民のための大東亜戦争詩―北原白秋氏に捧ぐ』（国民図書刊行会、1944 年）へ寄稿、『中等学生のための朗読詩集』（湯川弘文社、1942 年）を編纂するなど、「国民詩」の「朗読」に力を注いだ。

竹中郁とその周辺の詩人・芸術家の表現の軌跡を時系列にたどりながら、彼らの戦後の活動にも目を向け、異言語・異文化との接触が日本語・日本文学にもたらした影響について考察した。

これらの研究成果は「モダニズム詩人・竹中郁と神戸――海港都市のレスプリ・ヌーボー」と題して、2017 年 7 月 15 日に神戸文学館で開催された文学講座で報告した。

（3）文学者たちの海外体験をもとに切り拓かれた日本文学の新たな可能性は、十五年戦争を経て変容を余儀なくされていった。従来の文学史は、日本が敗戦を迎えた 1945 年に歴史的な分岐線を引き、引き揚げや植民地の記憶が戦後文学にもたらした問題について、歴史的な連続性を重視した検討をしてこなかった。

そこで、戦後に鋭く追及されることになる文学者の戦争責任をめぐる議論もふまえ、日本語・日本文学と異言語・異文化との接触が日本近代文学史の再編成とどのように関わり、記述されてきたのか検証した。戦前・戦中との歴史的連続性を重視するために、とくに、アジア太平洋戦争末期から終戦直後にかけて、その功罪が盛んに議論されたモダニズム詩に目を向け、モダニズムの詩的実践が戦後文学にどのような問題として浮上し、その議論から何が次世代に継承されていったのかを検討した。詳細は以下のとおりである。

1950 年代半ば以降、『現代詩』『ユリイカ』『現代詩手帖』と、詩の総合雑誌の創刊が相次いだ。遅れて創刊された昭森社の書物雑誌『本の手帖』（1961～69 年）は、戦前のモダニズムを代表する詩人・写真家の北園克衛が構成を手がけ、モダニズムに関連する特集を数多く組んだことで知られている。詩壇ジャーナリズムの形成は、戦後詩の歴史化と新たな詩的世代の登場を支え、戦前のモダニズム詩再評価の機運に寄与することとなった。

このとき、すでに戦後 10 余年を経ていた現代詩の歩みは、世代間のヘゲモニー争いを越えて、詩的言語の本質を原理的に問い直す時期に達していた。だが、それはモダニズムから反モダニズム、そしてモダニズムの再評価へという単線的な過程ではなかった。「近代詩」を超克する「現代詩」の構想は、先行する第一次戦後派（＝反モダニズム）への対抗として、自らの根源に戦前のモダニズムを新たに発見するという屈折した歴史意識の上になされ、その歴史観は今日まで引き継がれている。

戦前・戦中のモダニズムが異言語・異文化との折衝の中で見出した日本語・日本文学の可能性は、1950 年代以降に登場する新たな詩的世代にどのような可能性として見出されていたのか。全 84 冊に及ぶ『本の手帖』の特集と周辺資料の分析を行い、その問題系を歴史的に検証し、戦後に積み残された詩的言語をめぐる問題について考察した。

また、その研究成果を「〈現代詩〉についての覚書――モダニズム詩の再評価と『本の手帖』――」と題して、2017 年 11 月 18 日に関西学院大学で開催された昭和文学会 2017 年度秋季大会で行った。

（4）南満洲鉄道株式会社の鉄道附属地に点在した旧満鉄図書館の図書館報の調査を継続して行った。その中でも、とくに重点課題となっていた現地での詩・短歌・俳句・川柳等の短詩型文学の動向と日本近代文学の結びつきについて考察した。同地で発行されていた関連雑誌や日本語新聞の調査を進め、各種文学団体や同人の活動状況、地域ごとの分布、時期別の傾向の変化について整理した。その上で、国内の文学状況や日本人文学者との人脈から分析を加え、現地の短詩型文学をめぐる動向について総説を作成した。

また、短歌と川柳については、文学ジャンルの移植から定着、現地での展開と時期ごとに運動の詳細と傾向を整理した。その上で、とくに満鉄社員会を母体とする満洲郷土藝術協会の歌誌『満洲短歌』（1929～41 年）と、現地の歌人を糾合した満洲歌友協会を結成（1938 年）した歌人の甲斐水棹に着目し、その活動の詳細をまとめた。さらに、與謝野鉄幹・晶子夫婦の渡満が現地の短歌界に与えた影響を重視し、旅程と照合しながら視察や講話の内容を精査し、接触があった歌人とのネットワークから現地の文学運動との結びつきを探った。これらの成果の一部は『満洲事典』（筑摩書房、2019 年刊行予定）に納められる予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 3 件）

（1）<u>小泉京美</u>、越境する想像力――「外地」から見る日本近代文学――、第 52 回阪神近代文学会 2016 年度冬季大会、2016 年 12 月 10 日、武庫川女子大学（兵庫県）

（2）<u>小泉京美</u>、モダニズム詩人・竹中郁と神戸――海港都市のレスプリ・ヌーボー、神戸文学館土曜サロン・文学講座、2017 年 7 月 15 日、神戸文学館（兵庫県）

（3）<u>小泉京美</u>、〈現代詩〉についての覚書――モダニズム詩の再評価と『本の手帖』――、昭和文学会 2017 年度秋季大会、2017 年 11 月 18 日、関西学院大学（兵庫県）

〔図書〕（計 1 件）

井村哲郎、川島真、鈴木貞美、劉建輝ほか、筑摩書房、満洲事典、2019 年刊行予定、<u>小泉京美</u>、「短歌」「川柳」「満洲短歌」「甲斐水棹」「与謝野晶子」

６．研究組織

(1)研究代表者

小泉　京美（KOIZUMI,Kyomi）
武庫川女子大学短期大学部・日本語文化学科・講師
研究者番号：70779206